

中国資料による室町時代国語音声の研究

著者	大友 信一
号	2
発行年	1961
URL	http://hdl.handle.net/10097/14573

大 友 信 一
おお とも しん いち

学位の種類 文 学 博 士

学位記番号 文 博 第 2 号

学位授与年月日 昭 和 3 6 年 7 月 1 3 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当

研究科専門課程 東北大学大学院文学研究科
(博士課程) 国文学国語学専攻

論文題目 中国資料による室町時代国語音声の研究

論文審査委員 (主査)
教授 佐 藤 喜代治 教授 北 住 敏 夫
" 内 田 道 夫

論 文 内 容 の 要 旨

(一) 室町時代の国語音声进行研究する場合に、中国資料、朝鮮資料、キリシタン資料の3が、国語自体の資料以外に考えられる。この中で、中国資料が室町時代全般に亘っているので、最も適当な資料と言える。

(二) 私は、中国資料として、「書史会要」(1376)、「日本国考略」(1523)、「日本館訳語」(1549以前)、「日本図纂」(1561)「日本一鑑」(1564以降)「日本風土記」(原稿成立時期は1574?)の各書を主として使用し、当時の国語音声を推定しようとしたのである。

(三) この為に、資料とした各書の成立事情を確かめ、編著者を探り、その編著者の出身地の方言音に従って、音注漢字を翻訳し、この種の資料が、往々不確実となるのを克服する為に、音注漢字の使用頻度数を考慮して或る結論に達したのである。

(四) 中国資料によつて帰結される、室町時代国語音声の特徴を簡単に挙げる。

イ、「ち」、「ぢ」、「つ」、「づ」のアフリカータ化は、1500年頃に始まり、1550年に破擦音だけとなる。

ロ、「は」行子音の〔F〕から〔h〕への推移は、1550年前後から始まり、1600年では、「ひ」「へ」、「ほ」に多く見られて来る。

ハ、「が」行鼻濁音の発生は、1550年頃から始まり1600年頃には、「ご」などに完全に発生しているらしい。

ニ、4つ仮名の混同は、1500年頃に「ぢ」、「づ」がアフリカータ化したのに始まり、1600年に

は相当に混同している。なお、initial glide の鼻音は、混同を促進する方向に働いている。

(五) なお、私は、音声面から、室町時代を二分して、前期（始めから 1500 年まで）と後期（1500 年から終りまで）とする。

論文審査結果の要旨

室町時代の国語音韻は、従来、謡曲その他国内の諸文献、キリシタン関係の資料などによつて研究されるほか、中国、朝鮮の文献にも重要な資料として注目されてきたものがある。本論文は、これら諸種の資料のうち、特に中国で編述された文献で、日本語を多量に記録している点においてこの時代の国語の研究資料となるべきものを総括的に研究し、国語音声の実態を明らかにしようとしたものである。ここに「国語音声」としたのは、いわゆる音韻を体系的に考察するに先立つて音声の実態、推移を明らかにするところに、立論の用意が存するものと認められる。本論文において資料となる文献の解説に相当の分量を費やしているのは、研究の性質によるものであり、中国近世の音韻に論及しているのは副産物というべきものである。

本論文はすべて八章から成る。第一章は「室町時代と海外人の日本語研究」と題し、序論と見るべきものである。第二章以下の各章において「書史会要」「日本国考略」「日本館訳語」「日本図纂」「日本一鑑」「日本風土記」につき、それぞれの文献の解説、本文の解説を試み、日本語を記録するに用いた漢字の音韻を推定することによつて、書きあらわされた国語の音声を検討している。それらの結果に基づき、第八章では室町時代の国語音声について、その様相と推移とを述べて結論としている。

第一章ではまず室町時代の時代区分を論じ、従来の諸説を参考した上で、国語史では室町時代が延元 3 年（1338）に始まり、慶長 8 年（1603）に終わるとしている。次にこの時代の国語の諸相を概観した後、この時代、倭寇の進出に伴つて大陸との交渉が生じ、朝鮮、中国において日本並びに日本語の研究が盛んになつた事情を考察し、合わせてキリシタンの日本語研究にもふれている。この時代に関する諸種の資料のうち、中国の資料が時代の全般に及んでいる点で主要なものであると説き、しかも、漢字による日本語の表記には困難が伴うことをも認めている。

第二章は「書史会要」による国語音声の研究で、「書史会要」を解説した後、本書に収められたいろは字の漢字表記について論じている。その前提として表記に使用された漢字の音価を明らかにするには、元明時代の呉方言の音韻を考察する必要があるとし、そのため「中原音韻」「洪武正韻」の比較を試み、また現代中国語の方言音韻をも参照している。ただし、一字一字の音価についてはカールグレン、趙蔭棠、ジャイルズ、稲葉鼎一郎等の研究の結果を引用して列挙したに止まり、それらを基にして「書史会要」に用いられた漢字の音価を帰納するまでに至らなかつたところに研究の不備が認められる。音価推定におけるこの手順は後の各章にも通じて認められるが、この点は漢字音を通して国語音声を知る場合に最も重要なことであつて、本論文の弱点と言ふべきである。ただ、中国語研究の現段階においては困難な問題があり、恕すべき点もある。

この音価考察の結果に基づいて、「書史会要」に見られる国語音声の推定を試みているが、その結論は従来説かれたものと特に異なつていないわけではない。

第三章では「日本国考略」について研究している。初めに同書の解説を行ない、東洋文庫蔵の重刊本、内閣文庫蔵の写本並びに得月簞叢書本を比較して、原本の形態と諸本成立の事情とを論じ、次に本書のうち特に資料となる「寄語略」については本書の著者薛俊の手に成るものと考えている。次に「寄語略」の本文については、主として東洋文庫本により他の諸本を参照して、その所収の各

語について解説を試みている。解説に当つては先輩の諸説を参考し、また、それぞれの語のわが国における用例をも合わせ考えている。不明なものについては断定を加えることを慎むなど、その用意は周到であり、態度はおおむね穏当である。これは本論文を通じて見られるところである。ただ、たとえば「独眼人」に「密咬」とあるのは「メツコウ」かと考えながら、用例がないとしているが、この語は「温故知新書」にその例が見えるので、国内の資料に対する研究の不足が見られる。

この解説の結果に基づき、日本語を書き表わすに用いた漢字について、その音価を推定するために、「書史会要」の場合と同じく「中原音韻」の音価をあげ、また著者の出身地を考慮して、本書の使用漢字に反映していると見られる呉方言の字音をあげている。使用された漢字のうちで、使用度数の最も多いものを主とし、その音価に基づいて書き表わされた国語の音声を推定し、使用度数の少ないものを参考に止めるという方法をとつて、国語音声の推定を確実にすることを考慮している。その結果として、チツヂツの音が破裂音から破擦音に変化したこと、フ行音が〔f〕から〔h〕に移る傾向の見られること、濁音がその前に鼻音を伴うこと、イウの音が拗音になりつつあつたことなどを特に論じているが、清濁の対立は有声音、無声音の差だけでなく、鼻音を伴うか否かに重要な相違があるとしているのはやや注目すべき見解と言えよう。イウの音が拗音となつたとする点については、謡曲などでイ、ウと割つて発音する事実との関係を考察していない。なお、アウ、ヤウとオウ、ヨウ、エウとの、いわゆる開合の区別が明確でない点から、逆に当時の呉方言では豪、肴韻と宵、蕭韻との区別が無くなつてしていると推定しているが、論拠が十分でない。

第四章では「日本館訳語」について前章と同様の方法で研究を進めている。「日本館訳語」は「華夷訳語」の丙種本にのみ収められているが、その成立について弘治5年（1492）以後、嘉靖28年（1549）以前に成ることを考証している。本書を静嘉堂文庫本によつて解説し、国語を記録するに用いた漢字の音価と、その漢字によつて表記された国語の音声を推定している、その結果、タ行音、ダ行音の破擦音化が一層進んだこと、濁音の前に現われる鼻音が消滅の方向に向つたことなどを指摘している。

解説に当つて、たとえば、「走 嗑只各喇」とあるのは「かち（徒歩）から」という語かと考えられるが、これを「かけくら」の誤りとし、「喫 吾馬里峻」とあるのは「のまれさうえ」の誤りとしているが、むしろ「おまいりさうえ」とすべきではないか、また、「右 民急里」の「里」を衍としているが、「みぎり」の語の例と見るべきである。これらの点で、国語および中国語の研究が不十分で、推論に妥当を欠くところがある。

第五章では「日本図纂」について、まず解題を試み、ほとんど同一の国語語彙を収めている「籌海図編」との関係を論じている。「籌海図編」は「四庫全書総目提要」に胡宗憲の撰とあるが、実際は「日本図纂」と同じく鄭若曾の著述であることがすでに明らかにされている。本論文では、この事実を、今まで研究されなかつた諸本を詳しく調査することによつて更に確かめている。

本論文は、「日本図纂」が「籌海図編」の原稿の一部であるとする説に従い、進んで「日本図纂」に収められた国語資料の解説を行ない、また、使用された漢字の音価と、その漢字によつて書き表わされた国語の音声を推論することは、前章におけると同様であるが、なお、茅元儀の「武備志」によつて補わるべき資料をも合わせて考察している。考察の結果として、チツヂツの破擦音化が進んで、いわゆる四つ仮名ヂヅジズの混同が生じたこと、濁音の前に現われる鼻音がザ行音ではほとんど消失したことを述べている。

第六章では「日本一鑑」について、著者、成立事情について述べ、本書のうち「窮河話海」巻四「文字」の項と、同じく巻五「寄語」の項と、研究の資料となるものについて解説し、本書における語彙は、わが国の辞書「下学集」「節用集」等から採り、「日本館訳語」等に従つて分類したものと推定している。更に前の各章と同じく、国語を書き表わすに用いた漢字につき、著者鄭舜功が

広東出身であることを考慮して「中原音韻」等によりその音価を考え、その結果に基づいて国語の音声を推定しているが、「日本図纂」の場合と特に異なつた事実を指摘していない。

第七章では「日本風土記」について、まず編著者、成立年代、内容等について解説している。本書は「全浙兵制考」の付録として刊行されたものであるが、これとほとんど同一の内容をもつものに「日本考」がある。本論文では、両書は編者を異にしているが、もともと編者として名を掲げているのは、共に実際の作者ではないのであろうと推論し、更に、内容から考えて、本書は「全浙兵制考」の成立した萬曆20年（1592）より約20年も前に編述されたものではないかと見ている。次に国語の資料について考察し、寄語、山歌の解説を加えている。更に使用された漢字の音価を考え、これに基づいて国語の音声を推定している。その結果、四つ仮名がほとんど区別を失つたこと、濁音の前の鼻音の消失が著しいこと、ガ行濁音に鼻濁音が発生したかと思われる点のあることなどを述べている。この解説においても、たとえば「院 梭那又火運」を「その」「くわうん」の語とし「房 伏宿依葉」を「ほそいえ」の語としているがごとき、国語としての意義と用例との明らかでないものがあり、そのほかにも解説に疑わしいものがある。また、本書の山歌、琴歌について注釈を省略したのは粗略である。

第八章では以上の各章で資料として用いた音注漢字のうち、使用度数の多い代表的漢字をあげ、字音の上から見た全般的傾向を述べた後、各章において指摘した結果に基づいて室町時代における国語音声の様相と変遷を概括し、キリシタン資料だけを重んじて、もつぱらそれによつて国語音韻を説くことの不当であることを論じている。

外国人の記録した日本語について第一に問題になるのは、その記録が正確なものとして信頼しうるかどうかということである。特に漢字による記録にあつては、中国語の音韻が時代と地方によつて異なるため、漢字音の推定が困難である。また推定の結果に基づいて国語の音韻を帰納するに当つて例外的事実の処理も問題となる。本論文ではこれらの難点を必ずしも十分に克服したとは言えず、未解決の問題が少なくないだけでなく、論述が粗略に流れているところもあるが、中国の関係資料を総括的に考察し、殊に、及ぶ限り文献を精密に調査した努力と成果とは高く評価してもいいであろう。ただ引用の漢文に施した句読の正確さを欠くものが往々見られる。また、漢字の音価に関連して当時の吳方言に言及しているけれども、蓋然的推測にとどまり、もとより確証を提示したものではない。結論として提出された国語音韻の事実については今後検討すべき余地もあるが、将来この問題の研究に当つてその所論を無視することはできないと考えられる。論者はこの論文のほかにも、中国、朝鮮の国語資料につき、しばしば研究の成果を発表しており、文学博士の学位を得るに足る学力を有するものと認められる。